

留学生の地域交流をコーディネートして

藤 田 明 美

0. はじめに

本学の留学生に日本語を教える中で、時々耳にしていたのが、「せっかく日本に来たけれど、日本人と接する機会があまりない。」「自分の日本語がどのくらい通用するのか不安だ。」「もっと日本人の普通の生活を知りたい。」などの意見だった。なんとか留学生の「日本人と交流したい」という想いをかなえてあげたいと思いつつも、なかなか条件が整わず、実現できずにいた。

そんな折、筆者は住んでいる地域の行事で留学生の地域交流をコーディネートする機会を得た。それは、地域の公民館が、毎年、各小中学校から合計30人前後の参加者を募集して行っている合宿だった。その合宿は地域にある4つの校区を順番に訪ね、地元の人と協力し、その土地の特徴を取り入れた活動を行い、公民館に一泊するというユニークなものだった。

筆者は以前からこの合宿の実行委員をしていたため、公民館からの依頼もあり、本学に勤務し始めた4年前から、毎年この合宿に留学生を参加させていただいている。初回は4人、翌年は9人と参加者も増え、留学生にとっても、小中学生にとっても、また、地域にとっても有意義な交流が行われてきたのではないかと思っている。そして今年も、10月の初旬に留学生7人が参加した「体験合宿in大南」を大分市吉野地区で行ない、無事に終わることができた。ここからは、その合宿についての報告である。

1. 国家間の問題が留学生にも影響？

今回、平成22年の合宿も学内にポスターを貼っての募集から始まった。しかし、今年応募してきた中国出身の留学生はわずか1人だけだった。去年までたくさんの中国出身者が応募してくれたことを思うと少し意外だった。ちょ

うど、尖閣諸島沖で日本の巡視船に違法操業していた中国漁船が体当たりした事件がマスコミに大きく取り上げられ、中国では反日運動などが起きていた時期だった。国家間のこのような摩擦が地方にいる留学生にも微妙に影響したのだろうか。そんな思いの中、最終的に、参加者は、中国からの留学生1人、韓国からの留学生3人、台湾からの留学生3人、の計7人となった。

今回の合宿の特徴は吉野地区ならではの芋掘りと枝豆の収穫体験、そして名物「吉野の鶏めし」作り。それから、なんと1時間半も頂いた「国際交流タイム」だった。この時間は全て留学生に任されていたため、小中学生にとっても、留学生にとっても、楽しく印象深いものにしたかった。

そしてもう一つ、今回は今までの反省を生かし、留学生の中に一人リーダーを決め、リーダーから参加者に電車の時刻や集合場所などの連絡をしてもらった。授業で会うこともなく学部も違う留学生と連絡を取り合うことは、携帯を持っている留学生が多い昨今でもやはり一苦労だったからだ。

2. 雨が降っても子どもたちは元気一杯

当日は朝から、あいにくの雨だったが、留学生も無事会場に到着し、公民館スタッフ、地元の方々、そして子どもたちとの対面式が予定通り行われた。子どもたちもそれぞれが違う小中学校から参加していたので、中には人見知りをしたり、話のきっかけをつかめない子もいた。しかし、そこに留学生が入ることで、その友達作りも和やかにスムーズにいったようだった。

今回目立ったことは、参加した小中学生の中にもシンガポールやマレーシアに長期滞在していた帰国子女が3、4人いたことだ。日本語、

英語、韓国語、中国語が自然に飛び交っていたが、少しも違和感はなかった。国際化は意外に身近で進んでいるようだった。

そして、そんな第1日目のプログラムは地元で一番高い山、宮尾山登山から始まった。雨で中止かと思いきや、小雨決行。カッパを着たり、傘をさしての登山となった。留学生と子どもたちは雨も気にならないのか、元気一杯に登って行った。そして、山頂では地元の人から山の謂れなどを聞き、晴れていれば見えたであろう臼杵の町を思い描き、全員で記念写真を撮り、雨の中を下山した。昼食はふもとの公民館でとった。一緒に食事をする中で、だんだん子どもたちが留学生と打ち解けて来るようすが見られた。



食事の後、午後からの芋掘り体験は、畑がぬかるむため、近くの小学校体育館でのドッジボールとなった。芋掘り体験も面白かったと思うが、ドッジボールもなかなか白熱した戦いとなった。投げつけられたボールを軽々と受け止め、それを自分では投げずに子どもたちに渡し、一躍小中学生のハートを射止めた留学生もいるかと思えば、むきになって真剣にボールを投げる留学生もいた。また、試合はそっちのけで、小学生と楽しそうに遊ぶ留学生もいたり、普段大学では見ることのない姿が見られ、とても微笑ましく思った。留学生には緊張した様子は見られず、しっかり子どもたちと向き合い、うち溶けようとしている姿が見られた。



3. 火起こしから始まった夕飯作り

ドッジボールが終わった頃から天気も回復したため、宿泊予定の吉野公民館へ帰り、夕食の準備をした。それぞれが、カレー担当班、鶏めし担当班、飯盒炊爨担当班に分かれ、慣れない手つきで料理に取りかかった。中にはお米を研ぐのは初めてという子どももいた。火をおこすのも初めてらしく、なかなか火がつかず苦労していたようだった。

留学生の中には兵役経験者もいたが、自分で飯盒炊爨するのは初めてだと言っていた。カレーの方は家庭で手伝った経験のある子がかなりいたので、わりとスムーズにいった。鶏めしは、「鶏めし保存会」の方や吉野地区の食生活改善推進協議会の方にご指導いただき、出来立てホカホカのおいしい鶏めしをいただくことができた。自分たちで作ったご飯は格別らしく、留学生も、「おいしい、おいしい。」と何杯もお代りをしていた。



4. 「国際交流タイム」

食事の後、片付け、休憩をしたところで、お待ちかねの「国際交流タイム」が始まった。留学生全員が前に並び、一人ずつ自己紹介をした。そして、日本に来て驚いたことやうれしかったことなどを話した。

韓国の女子留学生からは、「カレーを食べるときに、ご飯とカレーを先に混ぜてしまった。すると、ホストのお母さんから、それは“猫まんま”といって下品な食べ方なのだと言われ、びっくりした。」とか、男子留学生からは、「電車に乗った時に、お年寄りが乗ってきても席を譲らない若者がいるのに驚いた。」などの感想

が述べられた。

このような文化や習慣の違いを小中学生に少しでも知ってもらおうと、この後、それぞれの学生の出身地に関するクイズに答える○×ゲームをした。

例えば、エスカレーターに乗るとき日本では左側に並ぶが、台湾では右側に並ぶ。○か×か？

台湾では昼食の後、学校でも会社でもお昼寝タイムがある。○か×か？

韓国では、食事の時、女性はあぐらをかいたり、立膝をしてもよい。○か×か？

中国では、日本人が挨拶の時、「いいお天気ですね。」というのと同じ感覚で「ごはん食べましたか。」という。○か×か？等々。

このゲームは正解を留学生に言ってもらい、それに関する説明も付けてもらったので、子どもたちだけでなくスタッフの方々にも「国が違うと習慣もいろいろ違うので、いい勉強になった。」と、なかなか好評だった。

中には、中国の首都は上海である。○か×か？という問いに、女の子がわたしの方に近寄ってきて、「“首都”って何？」と聞くので「capital city」というと、「ok」といって×チームに加わっていた。さすが帰国子女！

そして次は集合ゲーム、1から10までの数を中国語、韓国語で覚え、音楽に合わせて歌いながらリズムをとって回る。そして音楽が止まった時に好きな数を留学生に自国語で言ってもらう。言われた数がいくつかわかったら、その数の人数の輪になって座る。まごまごしていると、「ドジ！」と言われてしまう。そしてまた音楽がスタートすると、座っていたメンバーで立ち上がり手をつなぎ輪になって回る。また音楽が止まると留学生が好きな数を言う。これは、かなり盛り上がった。子どもたちは記憶力があるので、数字は意外と簡単に覚えてしまったようだ。

次はじゃんけん列車。子どもたちも留学生とじゃんけんをして、勝てば得意顔で先頭に、負ければ留学生の後ろに付き、一緒にムカデ歩き。じゃんけんは簡単で、みんな大好きだった。



このようなゲームをいくつかした後、最後に全員で肩を組み「友だちになるために」を歌った。『友だちになるために、人は出会うんだよ、どこのどんな人ともきっと分かりあえるさ…』とてもいい歌で、留学生と子どもたち、そして合宿に携わっているスタッフ全員で歌い、心が一つになった瞬間だった。

世界情勢はいろいろ変わり、国と国との関係には利害関係が付き物だ。しかし、わたしたち一人一人の関係には、国籍など関係ない。同じ人間同士、協力してより良い未来を作っていけると信じたい。そしてこの子たちにはそうであってほしい。そんな思いを込めた1時間半の「国際交流タイム」は無事に終わった。

5. 枝豆収穫

一夜明けて次の日は、昨日の雨がうそのような晴天。天気がいいと気持ちもウキウキ。朝の火起こしも楽しそうだった。しかし、昨日とは違うグループが火起こし担当だったため、やはり時間はかかった。それでも、自分たちで炊いたご飯の味はやはり格別らしく、朝から食欲も旺盛。

後片付けが終ると、待ちに待った枝豆収穫。軍手をはめ、畑までワクワクしながら出かけると、地元の人が収穫の仕方を教えてくれた。昨日の雨で畑はまだ少しぬかるんでいたが、子どもたちと留学生は渡された鎌を手に収穫に夢中になっていた。



6. 留学生を見ていて思ったこと

前日から留学生をずっと見ていて思ったのは、ほんとに全員が優しく、全ての活動において、子どもたちをリードし、サポートしていたということだ。子どもたち同士が喧嘩をし、少しむきになって、たたいたりした時も、自然に二人の間に割って入り、お互いが被害を受けないよう防御壁になってくれた。また、大人が口を出していちいち注意するところを、子どもたちサイドに立ち、よきお兄さんお姉さんとして自然に包み込み、リードしてくれた。

大学の授業で見ると限りでは、まだ日本語があまりしゃべれず、幼い印象を受ける留学生もいるが、実際は日本語がまだ拙いというだけで、精神的に幼いわけではないのだ。むしろ、とても優しく、しっかりとした大人の考えを持っているのだと思った。

それから、収穫も終わり、切り取った枝から葉を落とし、豆だけにして持ち帰った。前日収穫できなかったお芋も、事前に地元の方が準備して下さって、家に持ち帰ることができるようになっていた。これで、お母さんとお父さんへのお土産ができた子どもたちも留学生も嬉しそうだった。

この合宿に参加するまでは知らなかった「仲間」ができ、暖かい人の心に触れ、たくさんのお土産をもらい、子どもたちも留学生も満足した表情で公民館へ帰った。そして、お世話になった地元の方や公民館の方々への感謝もこめて全員で公民館の掃除をした。

7. 別れの時

別れの時間が近づいて来ると、元気に暴れまわっていた男の子達も、少し神妙な顔つきになってきた。そして、いよいよ退所式。あつという間の二日間だった。

公民館長さんをはじめ、社会指導主事や参加者代表の立派なあいさつの後、留学生も誰か代表が挨拶をと言われた。

急な指名にもかかわらず、今年、二年越しの想いをかなえた中国出身の留学生が感謝の意を込め、心配りのこもった立派な挨拶をしてくれた。その挨拶を聞き、留学生のお世話をした者として、とても誇らしく、嬉しく思った。

解散の後、迎えに来ていたお父さんやお母さんに子どもたちが留学生を紹介する場面も見られた。留学生のお兄ちゃんが大好きになった4年生の女の子がお母さんに、「お兄ちゃんが卒業して帰るとき、お兄ちゃんと一緒に台湾に行きたい」と言っていた。すると、お母さんがその留学生に「この子は一人っ子だから外国にお嫁に出せないの、だから卒業して台湾に帰っても、また日本に帰って来てね。」と嬉しそうに笑いながら声をかけてくれた。

その子が大人になるまで留学生のお兄ちゃんのことを忘れないで、好きでい続けてくれるかは別として、お母さんの「また帰ってきてね。」の優しい一言で、留学生の日本に対するイメージや日本語学習に対するモチベーションが上がったことは間違いないだろう。

合宿解散後、留学生全員から、「貴重な体験ができた。また何かあれば、いろんなことに積極的に参加したい。」という感想を聞くことができた。

その後何日かして、実行委員会の反省会があったが、そこで、小学生の短い感想文がいくつか紹介された。日常体験できない山登りや火起こしが楽しかったという感想が多かったものの、それと同じくらい留学生と遊んだこと、留学生とお友達になれたことが楽しかったと多くの子どもたちが書いてくれていた。

また、実行委員の方々からも、「子どもたち同士も違う小中学校から来ていて、友達になれるか戸惑っているところを、うまく留学生が間

を取り持ち、つなぎ役になってくれた。」「小学生同士でけんかをし、仲間外れになっている子がいたが、その子の側に留学生が自然に付き添ってくれていた。」「夜、なかなか寝付けない男の子に男子留学生が添い寝をして寝かせつけてくれ、その姿に感動させられた。」など、筆者も気づかなかった情報や感想を得ることができた。

そして、公民館長さんからは「留学生の合宿に与える影響はとても素晴らしいものがある。留学生がいてくれたからこそ、この合宿は成功したとも言える。ほんとに感謝の気持ちでいっぱいだ。」とのお褒めとお礼のことばまで頂き、筆者としても、ほんとうに嬉しく、「やって良かった。」という思いを強く感じさせていただいた。

とかく留学生は同じ出身国同士で固まってしまいがちだといわれるが、出身国は違って、合宿に参加した「仲間」という意識は小中学生のみならず、留学生同士の間にも生まれたのではないだろうか。

今回の「体験合宿in大南」を通し、まさに感動や心の交流を通し、子どもたちも留学生も同じ「仲間」として、一回り大きく成長したことを確信した。

8. おわりに

留学生との別れ際に、まだ日本語のつたない学生が、「これから日本語の勉強を一生懸命頑張ります。」と言ってくれた。そのことばを聞き、こういう合宿に参加することで、留学生の日本語に対する向学心が高まってくれば嬉しい。またそうであってほしいと思った。

今、本学では留学生に日本人学生との交流や地域との交流を提供したいと、部活や文化祭などを活用したり、国際交流会と留学生が協力してサロンを開設したりと、いろいろな努力をしている。

そんな中、この地域交流活動である“小中学生との合宿”が本学の国際交流推進に少しでも役立てれば嬉しい。公民館側からの、今後も毎年参加してもらいたいとの要請を受けているので、筆者としてもできる限り、続けさせていた

だきたいと思っている。

ただ、この合宿は年に1度しかなく、参加できる人数も10人程だ。もう少し多くの留学生に地域交流に参加するチャンスを作ってあげるためには、もう一度、地元の行事やイベントを見直し、留学生の参加が可能かどうか検討していきたい。

また、週末ホームステイのアレンジにも取り組んでいきたいと思っている。そうすれば、少しでも留学生の要求を満たし、日本語習得向上の動機付けにもなるのではないかと、そしてさらにそれが地域の活性化にも役立つのではないかと、思っている。

最後にこの合宿を企画していただいた大分市大南公民館の皆様、そしてご協力いただいた本学日本語教育研究センターの先生方にもお礼を申し上げたい。